一般財団法人日本不動産研究所㉝

地域資源を生かす

～まちづくりからインバウンドまで

夕張市＝炭鉱（ヤマ）の郷愁

エネルギー革命から半世紀

面影残し続ける炭鉱都市

夕張市は国内で唯一、「財政再生団体」に指定されている。17年度決算に基づく夕張市の健全化判断比率（速報値）の状況は、実質公債費比率が73・5％（市町村平均は6・4％）、将来負担比率は516・2％（市町村平均は34・5％）と突出している。

「山高ければ谷深し」という相場格言があるが、夕張市はまさしく炭鉱産業とともに歩んだ「炭鉱（やま）の町」の盛衰を物語る。

夕張市中心部へのアクセスは山間にあるが故限られており、南方面からは道路では国道274号から国道452号（夕張国道）に分岐して、鉄道ではJR石勝線「新夕張」駅から分岐する石勝線夕張支線を利用する（同支線も19年3月31日で廃線となることが決定された）。

夕張市は、明治後期から拡大した石炭産業における圧倒的なシェアを誇った北海道炭礦汽船㈱（北炭）の本拠地としての地位を確立し、最盛期は人口約10万8千人（60年国勢調査）を擁し、市街地に平地がほとんどなく、谷間の山肌に多くの住宅（炭鉱住宅）が張り付くように建ち並んでいた。

夕張市鹿の谷地区のはずれ、幹線道路から夕張川を渡ると草木が生い茂る山中に、夕張市の繁栄と北炭の栄華を偲ばせる建物が今も残されている。1913年、北炭の本拠地を夕張市に移転した際、来賓接待用として建てられた木造の迎賓館で贅を尽くした本格的和風建築物が夕張鹿鳴館（旧北炭鹿ノ谷倶楽部）である。

大正時代に増築を重ね、部屋数は30を超える大きさとなった。1954年年には、昭和天皇・皇后両陛下がご宿泊、1958には皇太子殿下もご宿泊された。2011年には、国の登録有形文化財にも登録されている。

明治開拓時代から戦後も昭和30年代まで、石炭は国内エネルギーの中心的な役割を担い、夕張市をはじめとした炭鉱の町は大いに栄えてきた。特に戦後復興に伴う経済再建のため、石炭は最優先で増産対策が取られた結果、当時の炭鉱労働者家庭とともに町も潤い、映画などの娯楽施設は充実し、当時の最新電化製品としてもてはやされた冷蔵庫、掃除機、洗濯機などもいち早く手に入れることができたと伝えられている。

人口は10分の1

1960年代以降、石炭から石油へと交代した「エネルギー革命」は、石炭を柱とした産炭地域と労働者に致命的ともいえる打撃を与え、その後の長い苦悩が続いている。

夕張市は夕張鹿鳴館が現存するように、北海道石炭産業の中心として、また北海道最大の炭鉱企業（北炭）のお膝元として道内でも大きな発展を遂げたが、その後のエネルギー政策の転換は、北炭にとっても、夕張市にとっても甚大な影響を及ぼし、15年の人口はついに9千人を切り、最盛期の10分の1以下にまで減少している。

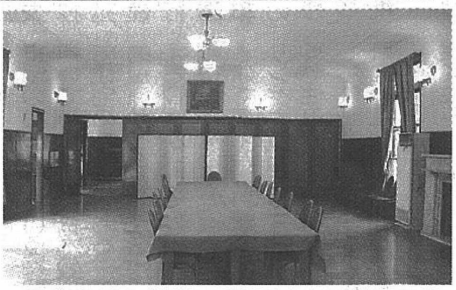
炭鉱の衰退からおよそ半世紀が経た現在、炭鉱に関連する施設や設備は、「炭鉱（ヤマ）の記憶」や「炭鉱遺産」として保存活動のほか、観光スポットとしても知られつつある。夕張市は、これからもかつてのような隆盛を取り戻すことはないかもしれないが、今も炭鉱都市「夕張」の面影を残し続けている。

（北海道支社、不動産鑑定士・遠藤公正）

夕張の繁栄と北炭の栄華を偲ばせる夕張鹿鳴館

繁栄した当時の夕張中心部（夕張市石炭博物館ＨＰより）

昭和天皇も宿泊された迎賓館



増築を重ね30超の部屋がある建物内部